三ッ沢 水で苦労した話

◀この上に水神様があった

市の北部地域の人々は、水道ができる以前、水が少なく大変な苦労をしましたが、三ッ沢地区を流れる滝川には、豊かな湧き水があり、周辺の人々も汲みに来ました。

今回は、水の苦労話を三ッ沢にお住まいの遠藤直治さん（77歳）と渋谷国男さん（59歳）に教えていただきました。

水量の減った湧き水

滝川は今でこそ水量が減りましたが、昔は湧き水で多くの水量がありました。中でも三ッ沢地区には、勢いよく湧き出すところがあり、人々はそこで、食事の支度や洗濯、水遊びをしました。

生活水の少なかった、間門・鵜無ケ渕・大渕荻の原の一部の人たちもおけを牛車に積んでは、汲みに来ました。

大正12年の関東大震災のことです。

地殻変動により水脈が変わったのか湧き水が急に細くなりました。困った地元の人たちは、豪農の家にあった井戸を借りましたが、水は足りません。

水の大切さを改めて知った人々は湧き出し口の近くに水神様を設けました。そして、その南側に井戸を掘ると豊富な水が出、戦後、上水道が引かれるまで、簡易水道の水源として利用されました。

水神様は、残念ながら昭和51年の七夕豪雨で流されたままになっています。遠藤さんと渋谷さんは、「自然が残されているこの一帯に遊歩道なんかができるといいね。川を汚す人がいるのは残念です。」と語っていました。

◀話してくれた遠藤さん（右）と渋谷さん（左）

地名の由来

三ッ沢（みっざわ）

三ッ沢は、明治22年3月1日、原田村と合併するまでは、三ッ沢村と呼んでいました。三ッ沢村の成立の時期は定かではありませんが、実円寺の創建が永享（えいきょう）4年（1432）ですので、そのころすでに三ッ沢村と呼んでいたように思われます。

三ッ沢という名は、この地区を囲むように三つの沢があることからつけた地名でしょう。

富士のあゆみ ⑨

吉原宿（よしわらしゅく）の移り変わり

◀現在の吉原本町通り

鎌倉時代の始めころから、元吉原地区の砂山の湊（みなと）寄りに見付（みつけ）が構えられていました。天文年間（1532年～1554年）のころ見付は漂砂（ひょうさ）や高波のために湊口から東の今井・鈴川地区へ所替（ところが）えしました。

そして、慶長（けいちょう）6年（1601年）徳川幕府（ばくふ）はここを東海道53次の一つの宿駅に指定し、元吉原宿と呼びました。

所替えした吉原宿も漂砂や津波の被害を受け、寛永（かんえい）16年（1639年）依田橋（よだばし）村の西方に移りました。これが中吉原宿です。

中吉原宿は、所替えしてから42年目の延宝（えんぽう）8年（1680年）、大津波によって全滅（ぜんめつ）し、また所替えしました。

天和（てんな）2年（1682年）、幕府から、2,500両という大金を借りて移ったところが新吉原宿です。

現在の吉原本町通りで、当時の家数は297軒でした。

こちら編集室

ことしは市制20周年。シンボルマークやキャッチフレーズも決まり、市の内部では着々と準備が進んでいます。編集室も忙しくなりますが、カメラを片手に張り切っています。

発　行・富士市役所　富士市永田町1丁目100番地☎51－0123　人　口　216,781人　男　107,668人　女　109,113人
編　集・総務部広報広聴課　世帯数　61,458世帯　（1月1日現在）